心の指針

木田　宏

柴沼直……その後に何と付けてよいか戸迷う。今どきの無難な敬称とすれば、柴沼直先生とするべきであろうが、どうも落付きが悪い。この本の題のように柴沼直さん、と記すのでは、遥か後輩の者が同世代の仲間を呼んでいるようにも思えて、気が引ける。

官職としては、東京教育大学長を最後に引かれたのであるから、先生とつけていい筈である。無難であり、妥当なのかも知れない。しかし、ご本人が元気であれば、「そんな呼び方はやめてくれ」と言われそうに思うのである。村夫子然とした風情があり、飄々乎としていて、「柴沼さん」というのが、矢張り落付きのいい表記のように思われる。

柴沼さんは、私が文部省に入省した頃に、社会教育局長に就かれている。四つ目の局長であったから、終戦直前からの激動期であったとは言え、古参の局長である。そして、昭和二十四年には、新発足をした東京教育大学の初代学長に就任して、文部省を去って行かれた。昭和二十一年入省の私とは、僅か三年し

か一緒にいないのであり、しかも、その間教科書局に勤務していた者にとっては、遥か彼方の人であった。それゆえ、具体的な人物像を想い出そうとしても、なかなか浮んで来ないのは、致し方ない。

柴沼さんは、社会教育審議会、保健体育審議会、教員養成審議会、大学設置審議会などの委員として、文部省に深く関係しておられたが、教科書局から千葉県へ転出し、初中局に復帰した私とは、仕事の上の連りが殆どなかった。しかし、それでも、心の中にある大事な先輩の一人として、柴沼さんを措くことができない。その声咳に接した人々から聞えてくる人物評を通して、また、先輩会などの集いでお会いする僅かな印象を通して、文部省における「西郷さん」のようなイメージができ上っているからである。

ある人は、掴み所のない人だという。決して口数の多い人とは思えない。しかし、そのやや大き目の体全体から伝わってくる大きさ、親しみ、そして、柴沼さんを知る人々の親愛の情、同年輩の人々の寄せる友情が、柴沼さんを床の間に据えてしまうのである。「直さん」という愛称が、いつの間にか、後輩の人たちにも気軽に使われていたが、やはりよくその人柄を示していると思う。そして何よりも、その想い出の集録を何年も経った今になって出版しようという、そのことが、慕われていた「直さん」の大きさを示す証左である。

修学旅行協会の会長をしておられた柴沼さんを、折々学長室に訪ねていた役員の一人が、その書棚に並んだ幅広い雑多な新刊書を見て、雑学の大家であると感嘆していた。決して、仕事だけの狭いお役人では

なかったのであろう。東京教育大学長に補せられたのも、そういう人となりのゆえであろう。お役人であって、お役人でない、そういう柴沼さんの人物像が、いつの間にか、私の中に出来上って、出来ることなら見習いたいと思うようにもなった。

文部行政に志して仕事する者にとって、どんな先輩のようにありたいかは、大変重要な心の支えである。私にとって、柴沼さんは、その意味での大事な先輩なのである。

人間どのように立派な人であっても、余り近くで接していると、つい余計なところまで目についてきて、目標となり難いところがある。富士山は遠くにあって美しく、また、立派な目標でありうるように、柴沼さんは、遠くにあって、いい目標を与えて下さった。

とくに国立大学の学長として、最後を飾られたことが、在官中の有難い指針となっていた。今日、このことは高嶺の花のようになっている。しかし、文部行政に育てられた者が、柴沼さんのように、立派な学長を勤められるようになることができれば、文部省の仕事にも、今一段の華を加えることになるであろう。

柴沼さんは、そうした努力目標としての心の指針であった。

（日本学術振興会理事長）